優れた生涯研修プロバイダーの輩出を願う

内山　充

薬学教育に６年制が実施されて医療科目が充足され半年の実務実習が課せられたとはいっても、免許を取得した薬剤師が直ちに患者と向き合って調剤業務や薬物療法での責任ある仕事が出来るとは誰も考えない。少しずつ経験と学習を積みながら一人前の薬剤師になる長い道のりがあることを、優れた薬剤師は皆実感している。

薬剤師社会が、しっかりした後継者としての薬剤師を育てるには、批判するよりも良いモデルを提供することが大切である。既存の薬剤師が手本を示すことが極めて効果的な手段である。薬剤師全体の信頼と評価を高めるためには、いろいろな形での教育指導体制が、薬剤師にとって重要な仕事であると言うことができよう。

今までは、教えることとは知的な情報や技術の伝達と考えられてきた。大学での卒前教育は主としてこの観念で行なわれ、どうやってそれを実行するかを体験としては教えていない、すなわち体得させていない。knowledge(知識)は得られても attitude(姿勢)にはなっていない。

そのために実務実習があるという声も聞こえるが、病院と薬局での 2.5 ヶ月ずつの実習では伝達ぐらいしか出来ない。一流薬大の偉い教授の中には「実習に 6 ヶ月なんて必要ない、1 ヶ月も有れば十分だ」と言う人もいる。皮肉屋バーナードショウは「できる人は実践し出来ない人は教える」と言ったそうだが、実践しないで教える人から見れば確かに理解と伝達には１ヶ月で十分かもしれない。しかし、できる薬剤師を育てるには６ヶ月でも、とても短い。

そこでどうしても必要となるのが生涯教育である。OJT ばかりではなく、システム化された生涯研修プログラムである。

生涯研修の提供者（プロバイダー）としてもっとも期待されるのは、先ずは豊かな教育経験に裏づけされ最新の知識と情報を伝達できる集団による指導的研修プログラムであり、もうひとつは、実務の経験豊かな職域で知的技術の実行を模範として示すことの出来る集団による計画的研修システムである。前者の代表は薬系大学であり、後者としては薬局薬剤師や病院薬剤師からなる意欲的職域団体・地域団体に期待したい。

薬剤師認定制度認証機構はこのような考えで優れたプロバイダーを育て、認証したいと考えている。最近認証された「東邦大学薬学部」や、近日中に認証が見込まれている「共立薬科大学」は上記前者であり、「薬剤師あゆみの会」は上記後者の好例である。

大勢の中にあって、意識の高いグループが優れた独自の企てをすると、周りが足を引っ張って自分たちのレベルにまで落とそうとするのが今までの日本社会に良く見られた姿である。社会は横並びで平和になるが進歩の無い倦怠感だけが残る。薬剤師社会はそうであってはならない。優れた生涯研修プロバイダーの輩出が、薬剤師の意欲的活動の指標となってほしい。